

今月のテーマ

戦争法（安保法制）廃止、立憲主義回復の国民的大運動を

戦争・軍隊と障害者問題史研究の立場から

戦後70年間、「社会的入院」のまま亡くなっていく（未復員）精神障害元兵員

15年近くにおよぶアジア・太平洋戦争において戦傷精神障害を負った兵員（軍人・軍属）のなかには、戦後70年にもわたって実質的には（未復員）のまま国立療養所などにいわゆる「社会的入院」受け入れ条件が整えば退院可能なのに入院）を余儀なくされたまま亡くなつていき、今やその戦争の歴史の証人がすべて消え去ろうとしています。

この事実は国民の間にとりだけ知られていないでしょうか。彼らが居なくなつても、その存在を決して忘れてはなりません。死者のことを記憶し、在りしときの苦難の

生を想像し、未来世代にわたって語り継ぐ人間の営為を止めたと、忘れられた歴史は新たな装いをもって、より残酷に繰り返されるに違いないからです。

ましてや現在、安倍自公政権は主権者である国民の意思をふみにじり、小選挙区制の弊害を利用した「数の暴力」によって、立憲主義・民主主義を蹂躪し、憲法違反の安保法制という名の戦争法を強行し、アメリカの戦争政策に加入し、肩代わりして、日本を再び忌わしい戦争をする国にしようとしています。このまま集団的自衛権などの行使を許すならば、他国民を無数に殺傷するばかりではなく、「わが軍」（安倍首相）におびたらしい戦死・戦病者、自殺者、戦闘ストレス障害（Combat

Stress Disorder）などをつくりだすでしょう。それを許さぬ決意をこめて、障害者問題史研究の立場から、戦傷精神障害兵員の戦中・戦後の一端を報告します（敬称省略）。

アジア・太平洋戦争と戦傷精神障害兵員問題

アジア・太平洋諸国への侵略戦争の拡大と植民地支配の強化のなかで、軍隊とくに陸軍では戦傷精神障害兵員問題が大きく顕在化し、陸軍省医務局は旧来の医療態勢の見直しを迫られ、1937年秋に至って戦傷病の研究・診療体制に関して総合的対策を立案。その具体的施策の一つとして、国府台陸軍病院（千葉県市川市国府台。現、国立精神・神経センター国府台病院）を全陸軍の主に精神神経疾患問題に対してセンター的役割をもつ一床をこえる規模の特殊専門病院に改組。1938年2月以降、敗戦直後まで約2万9200人余の戦傷病患者が入退院し、その内約1万4500人余はさまざまな精神障害（知的障害を含む）の患者でした。

下総療養所、1945年・肥前療養所を設置しました。このように日中戦争から太平洋戦争末期にかけて戦傷精神障害兵員対策が必要となった背景には、①戦争の拡大・長期化による兵力の大量動員（植民地の朝鮮・台湾からの徴兵・徴用を含む）と徴兵検査での心理学・精神医学的審査の欠落による知的障害を含む精神障害「帯患」入営者の増加、②大規模かつ苛烈な近代戦争としての戦場が兵員に耐えがたい衝撃・不安を及ぼし各種の精神神経疾患を発生、③私的制裁（集団的リンチ）など軍隊内部の暴力的・抑圧的な性格・構造による人間性の破壊、軍律違反の犯罪兵員や精神異常兵員の増加、等があります。

国府台陸軍病院の『病床日誌』の検討

国府台陸軍病院に1937年から軍医として応召し、戦後も国立国府台病院精神科医長を務めた浅井病院の創設者・浅井利勇は残された『病床日誌』全原簿8002冊を複写し、労作『うずもれた大戦の犠牲者—国府台陸軍病院・精神科の貴重な病歴分析と資料—』（私家版、1993年）を著わしました。

筆者は浅井の生前、千葉県東金市の浅井病院に通い、『病床日誌』複写版を閲覧させていただきながら、国府台陸軍病院での軍医たちの診療活動についてご教示を得ました。浅井の没後は細淵富夫、飯塚希世と『病床日誌』の共同研究を続けています。

一、戦争神経症について

『病床日誌』複写版8002冊のなかで戦争神経症関連疾患（ヒステリー、反応性精神病、神経衰弱）は1372人で、症状・経緯は①戦闘恐怖、②戦闘消耗、③軍隊生活不適応、④私的制裁、⑤自責念、⑥加害による罪責感の六つに類型化できます。

第六類型の一症例を紹介します。○（氏名省略）北支方面に出征、歩兵上等兵、31歳。決定病名「精神乖離症」。

「『病床日誌』診療記録欄には（昭和十三年八月十六日山東省ニテ良民六名ヲ殺シタルコトアリノ之ガ夢ニ出テウナサレテナラヌ」同年十一月十三日特二幼児ヲモ一緒ニ殺セシコトハ自分ニモ同ジ様ナ子供ガアッタノデ余計嫌ナガシタ。」

二、知的障害について

浅井の前掲書では464人だが筆者が全複写版の「病名欄」を見直したところ486人（6・1%）に及ぶ。

「未復員」精神障害元兵員を訪ねて

○氏名N・H。砲兵2等兵、20歳。内地より入院。決定病名「精神發育制止症（痴愚）」

社会に根強く残る精神障害への偏見です。死んで遺骨となつてようやく実家に（復員）できた例もあります。本年3月末現在、（未復員）精神障害元兵員の「社会的入院」は1都4県、計5人で殆どが90歳代後半です。このような悲劇を二度と生み出さないために戦争法を廃止し、立憲主義・民主主義を回復し、人類共有の宝である憲法9条を守り、発展させていく国民的大運動を強め、広げていきましょう。（15・9・22、記）

参考文献

- ①清水寛編著『日本帝国陸軍と精神障害兵士』（不二出版、06）
②清水寛編『資料集成 戦争と障害者』全7冊（15年戦争極秘資料集 補巻28、不二出版、07）
③秋元波留夫・清水寛共著『忘れられた歴史はくり返す—障害者が戦場に行った時代—』（きょうされん、06）
④清水寛「戦傷精神障害兵員の戦中・戦後」『季論21』第29号、15・7。

Table with columns for patient names, hospital names, and dates. Includes a section for 'White Powder' (白粉).

「甲種」合格の現役兵として入営し中国戦線に派遣されたK・Sの「病床日誌」の第壹号写紙の表面（一部抹消）

清水寛（しみず ひろし）

埼玉大学名誉教授